

学生生活最後の夏、新たな発見最初の夏 ～延辺大学訪問プログラムを通して～

はじめに

「延辺大学の学生に会いに行ける！」ほぼその気持ちだけで参加した今回のプログラムだった。だが、日を重ねる内に予想していなかったことをたくさん感じるようになり、学びの多いプログラムとなった。今からこの夏の経験を通じて私が感じたことの中から、特に書き残しておきたいことを大きく4つに分けて書いていこうと思う。

1)「無難に回避」は無難じゃない

まさかこんなに実感することの多いプログラムだとは思わなかった。「そのこと」について考えたことはあったし、知っているつもりでもいた。でも、本当の意味ではどういうことか知らなかったし、今でも分かっているわけじゃない。プログラムに参加する前の私にとって、政治とか文化の話は、大部分は迷いつつも「じゃあ、しないでおこう」と思うってしまうようなものだった。おそらく、「触れない方が無難かも」と思うということは何かしら自分にとって不都合なことがあるということを知っているからだと思う。でもそのことに触れず、ある意味ずっと逃げていたら何も進まないということを知った。私は小さいころから「無難に生きよう」と思う癖があるようだ。だから、例えばデリケートそうな話をしていたらできるだけ聞いていないふりをしようと思っていたし、話に入るなんてもってのほかだと思っていた。でも、プログラム中の学びから、向き合うことの大切さと、避けることは何の問題解決にもつながらないということを感じた。私は、少しだけそれらに向き合ってみることで、知っているつもりになっていることが多すぎたということがはっきりと分かった。具体的

にどんなことについてかは、今回は書かないでおきたい。これこそ私の逃げの姿勢なのかもしれないがこれが今の私なので見逃してほしい。様々なものの見方や考え方は小さいころからどのようなものに触れていたか、触れさせられていたかにも左右されると思う。私はひとつの言語でしかメディアを見てこなかったし、おそらくこれからもそうだ。どこからの情報であっても何かしらの「寄り」があるし、中立的な目線で物事をみられることなんてないと思っている。だからこそ、人と人が直接話すことに意味があると思う。以前の私は、「頭では知っていたし、頭では考えていた。でも、心では考えていなかった。」こんな状態だったのだと思う。心で考える必要があることはたくさんあってそのために敢えて触れることも必要な時があるのだと知った。「話題を避ける＝逃げること」は何の進展にもつながらないと思うようになった。

2) スンデとわたしの関係から

たった数日間共に時間を過ごただけなのに、私の心には多くの「友達」との思い出が残っている。どうしても国という単位でみると今でも解決していない問題がたくさんある。でも、人という単位で考えると実はとっても仲がよかったのかもしれない。だから国という単位で仲良くできてない問題が残っているというのがどうしてももどかしい。一緒に時間を過ごした友達とは仲良くなれる。国という「箱」に縛られすぎのも考えものだ。「箱」に縛られた良くない先入観なんて取っ払ってしまいたいと思った。友達になることで、「箱」に縛られない考えができるようになるのではと考えている。私の考えでは「箱」なんて後からくっつけられたもので、それによって関係性が悪い方向に行くなんて嫌だと思っている。単なる「箱」に縛られずに、同じ地球上の人間として仲良くしたい。そんな風に、漠然とだけ思うようになった。

「腸詰めはどんなものでも食べられない」と勝手に決めつけていた私が、今回の旅で腸詰めのスンデを問題なく食べられたように、先入観に、思考や行動が妨げられないようにしたいと思うようになったのだ。

3)「ここ」で感じる

話をすること、見ること、触れることで直接心で感じるが多かった。今までの私の傾向は、「頭では知っていたし、頭では考えていた。でも、心では考えていなかった。」先ほども同じことを書いたような気がする。博物館に行ったり、山に登ったり、ホームビジットをしたり、餃子を作ったり、カラオケで遊んだりと様々な経験をする中で、心で感じるが多かった。私はどちらかという心で感じるというより、頭に留めておくタイプだと思う。でも、実際に目で見る、話をすることで直接響くものがあると知った。私のような頭で感じるような人にとっては、実際に行って、見て、聞いて、話すことが必要で、とても貴重な時間になった。心で感じることでその学びは簡単には忘れないものになるだろう。これこそ私が延辺に行ったことの意味だと思う。

4)「つくあ〜」と杯を酌み交わすこと

そう、やはり私がぜひとも書き留めておきたいのは「食事を共にすること」についてだ。これは決して私が食べるのが好きだからという理由だけではない。一緒に食事をし、会話をすることで近い存在になれるということを強く実感したからだ。食べることは生活に欠かせないことで、その時間を共にすることで親近感がわくと感じるのは私だけではないだろう。よく、ランチやディナーと話し合いを同時にやるのを見るのもこのことが理由にあるのだろうと思った。食べながら話すと案外本音で語り合えるし、寛容にもなれる気がした。

おわりに

なんといっても忘れてはいけないのは、今回のプログラムのために様々な面で支えてくださった方々への感謝だ。私はこの夏にとっても貴重な経験をすることができた。それは、プログラムを企画してくださった方々や、現地で歓迎し、案内などをしてくださった方々のおかげである。こんなにも感じ、考えることのできたのは久しぶりでとても実りの多いものとなった。感謝してもしきれないくらい気持ちでいっぱいだ。

